S-7

赤十字病院の役割
内科医師退職問題による地域医療崩壊の危機に直面して

北見赤十字病院　副院長・第一麻酔科部長

○荒川（あらかわ）　穣二（じょうじ）

日本赤十字社が掲げる赤十字病院の役割には、地域医療、公的医療、国内災害救護、国際活動、看護師の養成等がある。北見赤十字病院は、北海道の東部（道東）に位置するオホーツク地域の地方センター病院である。救命救急センターをはじめ、地域医療支援病院、災害拠点病院、地域癌診療拠点病院として、赤十字病院の役割を充分に果たし、高度医療・地域完結型医療に取り組んできた。しかし、本年1月中旬に判明した消化器科、循環器科を除く全内科医退職問題は、当院はもとより、地域住民、地元医師会、近隣医療機関、行政等をも巻き込み、地域医療崩壊の危機としてクローズアップされた。今回の事態により、赤十字病院の役割である地域医療（地域に根ざした医療活動）や公的医療（救急医療やへき地医療など）の継続が根底から揺らぐこととなった。事態判明から約5ヶ月経過した現在、多方面の協力を得て、状況は少しずつではあるが改善傾向にある。今回のメインテーマである「地域医療を守るための取り組み」に関して、当院の現状を発表する。【病院内の取り組み】病院長を本部長として地域医療維持対策本部を立ち上げ、内科診療体制検討部会、救命救急業務部会、内科疾患対策部会、教育研修業務部会を設置し検討した。また院内医師と意見交換を行った。問題点として内科医師の過重労働や救急業務（当院は一次から三次まで対応）の多大なる負荷が明らかになった。病院の長期的方針として、一次救急の返上、二次救急の輪番制による適正化、三次救急の継続を決定した。【行政・医師会との連携】北見市、保健所、医師会、当院が参加して北見赤十字病院内科患者医療対策連携会議を毎週行い、患者相談窓口の設置、入院・外来患者の転院状況の把握に努めた。また医師会員、救急告知病院等に対して当院の現状を説明し、一次救急、二次救急に関して協力を得た。【地域住民への周知】ポスターの院内掲示、広報誌等を通じて当院の現状を周知した。また難病連主催の「オホーツク圏の医療を考えるみんなの集い」、医師会主催の「地域医療を守る医療者と市民の集会」に出席し、当院の現状と対策に関して発表して理解を求めた。【内科医師確保に関して】退職意向の内科医師の慰留につとめ、一名の賛同を得た。医育大学、赤十字本社に医師派遣要請を行うと共にメディア等で医師の募集を行った（行政も独自の活動あり）。結果、赤十字本社経由で、大阪赤十字病院、和歌山赤十字病院、山田赤十字病院、赤十字社医療センターから交代で一年間二名の内科医の派遣応援を得た。また新病院長の発案で内科医師招聘のためのバックアップ体制の一つとして、6月9日より内科・総合診療科外来を開始した。さらに7月から呼吸器科常勤医一名を確保した。【今後に向けて】今後も内科医師確保に向けて継続的な努力が必要である。また救急医療体制をはじめ、今後の当地域の医療体制再構築に際し、行政、医師会、近隣医療機関、そして地域住民と共通認識を持ち、共に歩むことが肝要と考えられる。